

特集 小泉「圧勝」で日本はどうなる!?

野党よ、もっと知恵をしぼれ

「弱肉強食」路線に対抗する選択肢を

山口二郎 北海道大学教授

自民党「圧勝」につづく郵政民営化法案の可決と靖国参拝、選挙では言われていかなかった増税案もチラホラと顔を出し、まさにやりたい放題の小泉「新自由主義」政権。いったい野党は何をしているのか。

民主党はなぜ負けたか

——今回の選挙は同時に民主党の大敗という結果でもあったわけですが、この結果はどうご覧になっていますか。

民主党がなぜ負けたのかといえば、小泉政治に対する別の選択肢を提示できなかったことが最大の敗因でしょう。郵政民営化に対する対応を間違ったとか、メディアが小泉首相ばかり取り上げていたとか、そういうことは本質的な問題ではありません。基本的な問題として、小泉政権が進めている「構造改革」に対して、民主党がどう対決していくのか、その点が提示できていません。

前原さんが新しい党首になり、自民党に対して対案をぶつけていくと言っていますが、そういうことが民主党の今やるべき仕事なのか、疑問ですね。民主党にとって必要な作業は、小泉政権の進めている新自由主義というイデオロギーに対抗しうる別のイデオロギーを提示することでしょう。

小泉が首相になってからの数年間で日本社会に起こった変化ははつきりしていて、生活の不安定化や格差の拡大といった状況が、特に若者や貧困層などに表れています。自民党がここまでばかりと新自由主義というイデオロギーを出してきているなか、それに対抗する選択肢としての社会民主主義、あるいはアメリカでいう民主党のリベラルという選択肢を、今こそきちんと提示するべ

きでしょう。自由より平等・公平を重んじ、市場を合理的にコントロールする路線をきちんと提示できなければ、二大政党にも競争にもなりえませんよ。にもかかわらず民主党は今回、それを回避してしまっただけです。

「マニフェスト」もピント外れでした。各論はそれなりにできていたのですが、こここそ官僚出身政治家を多数抱える民主党の限界があります。各論をつないだときに浮かんでくる理念、この社会をどうしていくのかという理念がはつきりしているかどうか、政党の政党たるゆえんです。そこが役人と政党の違いです。民主党はその全体像がまったく示せていません。

個人的に、たとえば子育て支援だとか年金だとかでは多少は社会民主主義的な政策も出していますが、全体として、民主党が目指しているのはアメリカ型の弱肉強食・格差拡大路線なのか、それともある種のヨーロッパ型の平等公平路線なのか、民主党はその議論をする党内がまとまらないので、ずっと逃げているわけですが、そんな状況では負けが当然ですよ。

——そうした問題は選挙後の今もあまり変わりませぬ。郵政民営化でも民主党のほうが悪質な案を出しています。

新自由主義の土俵に乗って、どちらが小さな政府なのかという競争をしていますが、それでは自民党の掌の上で踊ってわがわが自分が不利になる新自由主義を選択するのかわりませぬ、それは歪んだ平等主義なのではないかと思えます。つまり、プチ不平等に対する歪んだ正義感が、グローバル資本主義の下で起こる巨大な不平等を許してしまっているという構図があるのではないのでしょうか。

プチ不平等に対する憤りの対象として標的になっているのは公務員です。今回の「官から民へ」というスローガンで、どうして郵便を公務員がやる必要があるんだという小泉のフレーズは効果があったと思えますね。パブルがはじけて15年、民間はリストラでずっと苦労してきて、雇用は非常に不安定化し、賃金も下がっている。将来への不安に欲求不満が溜まっている状態です。その地点から見れば、雇用も給料もそれなりに安定している公務員という存在は不平等に見える。ホリエモンが株を右から左へ動かして何億もの金を儲けるようなことは、すでに嫉妬の対象ですらない。巨大な不公平の象徴である六本木ヒルズには怒らないけど、身近な公務員宿舎には怒る、そういう構図ですよ。

——むしろ「勝ち組」がプチ不平等を押しつぶしていくことに期待してしまっつ。

プチ不平等をなくそうとすると、年収300万円の人を500万円にまで戻すのではなく、逆に500万円ある人

ているようなものでしょう。

1年前、『戦後政治の崩壊』という本のなかで私は「改革の競り上げ」という言葉を使って、90年代の一連の改革の流れを説明しましたが、今まさに改革の競り上げ現象が起こっています。民主党は野党としての存在理由を見失っているのと同じような状況があります。比例の定員をさらに減らすという提案にしても、一連の憲法論議や郵政民営化にしても、自民党と同じベクトルを向いて、どちらがより過激なことを言うのかという競争をしている。前原さんが党首となって、その傾向が顕著になっています。自民党への大敗北を受けて、どのように民主主義の建て直しをはかるのか、民主党の党首選では、いささかやる気を失っているように見える菅さんよりも、世代交代を図って自民党に対抗するという選択をしたのかもしれませんが、若けれ

ばいいというものではないでしょう。今の民主党に必要なのは、選挙の総括をしつかりとやって、党の再建に向けて路線論争をすることです。

——現在の民主党にそうした路線が選択しえるのか、根本的な疑問もあります。

確かに、民主党はさまざまな傾向を持つ政治集団の寄り合い所帯であり、出自からして限界があることは間違いありません。ただ、当人たちの主観的な好みとは別の問題として、客観的に日本で二大政党制や二極的な政党システムを作ろうとしたら、自民党の左側にポジションをとるしかないんですよ。

小泉までの旧来の自民党は、自由と平等、あるいは成長と分配という、それぞれ矛盾しきれない価値を同時に並立させるという芸当をやってきました。その

プチ不平等への歪んだ憤り

——自民党に投票した有権者は、小泉政権に何を期待したのでしょうか。

選挙直後に論評を書いたとき、有権者は騙された、あるいは、国民は「勝ち組幻想」を持っているのではないかと、う言い方をしたのですが、しかしそれは間違っていたと今は思っています。

いまさら普通の人が一念発起してビジネスを起こしても、ホリエモンのように成功するはずがない。そんなことはみんなわかっていますよ。それなのにどう